

## 第 266 代教皇フランシスコ 略歴

アメリカ大陸初の教皇となったホルヘ・マリオ・ベルゴリオは、アルゼンチン出身のイエズス会士です。教皇選出当時は 76 歳で、ブエノスアイレス大司教でした。米大陸ではすでに優れた人物と知られ、質素で、とても愛されていた司牧者でした。大司教になっても、たいていは地下鉄やバスを利用し、遠くにもおもむき、広く動き回っていたからです。

アパートで自炊する暮らしを選んだことについて、「わたしの民は貧しく、わたしもその一人」と語っていますが、教皇になってもこの基本姿勢は変わっていません。

部下である司祭たちには、あわれみ、勇気、すべての人に扉を開いておくことを求めています。これらは今も変わらず信者に求め続けています。教会にあって最悪なのは「自己中心になること」、キリスト信者であるならば、「人間の尊厳を踏みにじることは大罪」だと知っていなければならない——こうした教皇の考えは、ごくシンプルなものです。社会正義を説く際には、カテキズム\*、十戒\*、真福八端\*を振り返るよう教えています。

### 初の南米出身教皇誕生までの歩み

#### ■アルゼンチンでの誕生、そして司祭に

1936 年 12 月 17 日、イタリア・ピエモンテ州からの移民の子として、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで生まれる。父マリオは鉄道会社に勤務する会計士、母レジーナ・シボリは 5 人の子育てをする専業主婦であった。

化学技術者として学業を修め、生物化学の研究所で数年間働いた後、司祭になる道を選び、ビジャ・デボートの教区神学院に入学。1958 年 3 月 11 日、イエズス会に入会し修練者となる。1963 年、チリで教養課程を修了するとアルゼンチンに戻り、ブエノスアイレスのサンミゲルにあるサンホセ大学の神学部で哲学課程を修了（哲学学士）。1964－65 年はサンタフェのイエズス会が運営するインマクラダ大学で文学と心理学を教え、1966 年にはブエノスアイレスでイエズス会のサルバドル大学で同じ教科を受け持った。1967－70 年の間は再びサンホセ大学に在籍し、神学課程を修了した。

33 歳を迎える直前の 1969 年 12 月 13 日、ラモン・ホセ・カステジャーノ大司教により司祭に叙階される。叙階後、イエズス会の最終養成期間である第三修練期を、1970－71 年にスペインのマドリード近郊アルカラ・デ・エナーレスで過ごし、1973 年 4 月 22 日に終生誓願を宣立。その後アルゼンチンに帰国し、サンミゲルのヴッラ・バリラリ修練院院長、サンホセ大学神学部教授、イエズス会管区顧問などを歴任し、またサンホセ大学では神学・哲学部学部長も務めた。

1973 年 7 月 31 日、イエズス会のアルゼンチン管区の管区長に選出され、6 年間その任を務める。その後大学の仕事に戻り、1980－86 年はサンホセ大学の神学・哲学部学部長に再任、さらに貧困地区にあるサンホセ教会の主任司祭として司牧も行った。1986 年、博士論文のためにドイツに留学。アウグスブルクで「結び目をほどくマリア」の絵画と出会う。その後すぐ、上長の命でアルゼンチンに帰国し、サルバドル大学に派遣される。次いで、コルドバにあるイエズス会の教会に、霊的指導者、聴罪司祭として派遣された。1987 年には、宣教活動視察のために日本を訪れている。

#### ■ブエノスアイレスの司教に

ブエノスアイレス大司教アントニオ・クアラチノ枢機卿が、手足となる協力者としてホルヘ神父を望み、1992 年 5 月 20 日、教皇ヨハネ・パウロ二世よりブエノスアイレスの補佐司教に任命され、同年

6月27日、クアラチノ枢機卿により司教叙階。司教の紋章にはイエズス会の印章を添えられ、モットーは「あわれみ、そして選んだ（*Miserando atque eligendo*）」（「教皇の紋章」参照）とした。

その直後フローレンス地区の司教代理に、翌1993年12月21日にはブエノスアイレス大司教区の司教総代理に任命された。1997年6月3日にはブエノスアイレス協働大司教に任命されたが、こうした一連の任命はだれもが納得したと言われている。その後、クアラチノ枢機卿の死去に伴い、1998年2月28日、アルゼンチンの首座大司教（アルゼンチンに複数名いる管区大司教の中で首位）でもある、ブエノスアイレス大司教を引き継ぐ。同年11月6日にはアルゼンチン在住で自己の裁治権者をもたない東方典礼カトリック教会の信者らの裁治権者の任も受ける。またブエノスアイレス大司教の役職として、教皇庁立アルゼンチンカトリック大学の総長にも着任。

当時の著書として、『修道者のための黙想（*Meditaciones para religiosos*）』（1982）、『使徒的生活に関する考察（*Reflexiones sobre la vida apostólica*）』（1986）、『希望の考察（*Reflexiones de esperanza*）』（1992）などがある。

## ■枢機卿になる

大司教着座から3年後、2001年2月21日付で教皇ヨハネ・パウロ二世より枢機卿に親任される。名義教会\*はサン・ロベルト・ベラルミーノ教会。バチカンでの枢機卿親任式にあたり、ホルヘ枢機卿は信者らに対して、お祝いのためにローマまで来ないで、その渡航費を貧しい人に分けてほしいと呼びかけた。大司教として、とくにスラム地区の司牧に力を注いでいたホルヘは、「スラム司教」とまで呼ばれていた。

枢機卿になって一年にも満たない2001年10月、第10回通常シノドス（テーマ「司教の奉仕職」）の総書記に任命される。総書記は当初ニューヨーク大司教が務める予定であったが、9月11日の米国同時多発テロ事件対応の帰国により委嘱された。この会議の中でホルヘ枢機卿は、「司教の預言的使命」を強く訴え、司教は「義の預言者」であり、社会正義を「たゆまず説く」務めと「信仰と倫理について真正な判断を表明する」責任をもっていることを強調し、参加者に強い印象を残した。

国を越えラテンアメリカ内においてホルヘ枢機卿の人気は高まっていったが、それでも豪奢を避け質素な暮らしを好むため、彼を「修行僧」と呼ぶ者もいた。2002年にアルゼンチン司教協議会会長への任命を辞退するが、3年後に再任命される。このときは引き受け、さらに3年後に再選され、2008年まで同職を務めた。

枢機卿として、ローマ教皇庁の6つの組織の要職にも就いた。すなわち、典礼秘跡省、聖職者省、奉献・使徒的生活者省、ラテンアメリカ委員会、シノドス事務局常任評議会である。2005年4月には、ベネディクト十六世が教皇に選出されるコンクラーベ（教皇選出選挙）に出席。

## ■四つの宣教目標

ベルゴリオ枢機卿は、300万人以上の人口を有するブエノスアイレス大司教として、「交わりと福音宣教」に焦点をおいた四つの宣教計画を立てた。

開かれた、兄弟愛のある、共同体づくり。

自覚を目覚めさせ信徒を主役にする。

町の住人一人残らず、すべての人に福音を届ける。

生活困窮者と病者に手を差し伸べる。

それは、「そこに暮らす人のこと、彼らがどのように生きてきたか、その人生を考え」つつ、ブエノスアイレスを新たに福音化するためのものであり、司祭だけでなく信徒にも協働を呼びかけた。2009年9月には、アルゼンチン独立200周年行事の一環として、2016年までに200の慈善事業を立ち上げる全国規模の連帯キャンペーンを展開した。

南米規模のことに触れるなら、2007年にブラジルのアパレシーダで開催された第5回ラテンアメリカ・カリブ司教協議会総会の最終文書であるアパレシーダ文書に大きな希望を抱き、期待を込めてラテンアメリカの『福音宣教 (Evangelii Nuntiandi)』（教皇パウロ六世の使徒的勧告\*）と呼び、後の教皇としての自著『福音の喜び』にも多くを引用している。

## ■ “フランシスコ” という名

この名を選んだことについて、教皇自身がメディア向けのあいさつの中で次のように語っています。「コンクラーベで3分の2の得票で教皇選出が決まると、隣に座った親しいフンメス枢機卿（サンパウロ大司教）から抱擁と接吻を受け「貧しい人々のことを忘れないで」といわれた。——貧しい人々、貧しい人々。それが響いた。アッシジのフランシスコが浮かんだ。続いていた得票計算の間、戦争のことを思った。フランシスコは貧しさの人、平和の人、被造物を愛し、守った人。現代の、被造物とのあまりよくない関係を思った。（略）わたしは強く、貧しい教会を、貧しい人のための教会を望んできた」

## ■ フランシスコ教皇の紋章



教皇の紋章では伝統的に、垂れ飾り付きの三重冠を戴き、組紐のある使徒ペトロの鍵、すなわち金の鍵（天上の鍵）と銀の鍵（地上の鍵）に盾が組み合わされています。

フランシスコ教皇の紋章は、前任のベネディクト16世同様、三重冠ではなく司教のミトラを戴いています。青の盾には、イエズス会の太陽の徽章（赤で十字架が付されたIHSの文字、黒で3本の釘）が描かれ、金の塗りと黒の描線で描かれた八芒星（マリアの象徴）と香油の元となる植物スパイクナードの花（ヨセフの象徴）が配されています。表地が銀、裏地は赤のリボンには、モットー

“MISERANDO ATQUE ELIGENDO”（あわれみ、そして選んだ）が書かれています。

このモットーは、聖ペダが福音記者マタイの召命を解説したものです。教皇は、ブエノスアイレス大司教時代から（枢機卿になっても）、この言葉をモットーとして選び、紋章に付し続けています。

「収税所の前を通ったとき、イエスの目はマタイの目をとらえました。それは、その男の罪をゆるすあわれみに満ちたまざしでした。そして他の弟子たちの抗議を制して、マタイを、罪人にして徴税人であるこの男を、使徒の一人とするためにお選びになりました。聖ペダは福音のこの場面を注解してこう記しています。イエスはマタイをいつくしみに満ちた愛をもって見つめ、そして彼を選ばれた——あわれみ、そして選んだ、と。わたしはこの表現にずっと感銘を受けており、このことばをモットーにしています」（『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』8）。